

## 令和6年度第1回学校運営協議会 記録

令和6年6月13日

14:30～会議室

司会 副校長

記録 教頭

出席者 学校運営協議会委員 7名（欠席 2名） 本校教職員 6名（欠席2名）

\*開催前に委員の委嘱

### 1 学校長あいさつ

学校運営協議会の制度・目指すところについて説明。

今年度は地域連携の観点、生徒が主体的に地域へという観点を意識して取り組みたい。

神奈川県では第三者評価として、学識経験者による教育活動への評価を学校経営に活かすという取組を行ってきたが、今年度からは県立高校全体へ学校運営協議会を通して第三者評価の手法を広げることとなった。学識経験者に委員として2名の参加を求め、その役割を担っていただくというものである。昨年度までコロナ禍により、開催が難しかった部会も本来の形に戻していく。

### 2 令和6年度委員の紹介

鈴木 淳子 女子美術大学教授

田中 さくら 横浜市立鳥が丘小学校長（欠席）

岩下 亜紀子 上矢部高等学校 PTA 会長

小泉 孝行 鳥が丘自治会長

熊野 リカ 横浜市立領家中学校長

杉本 次郎太 多摩大学入試課課長

岩谷 大輔 学校法人岩谷学園理事長（欠席）

佐藤 洋資 横浜市障害者就業・生活支援センター主任就業支援担当

築瀬 公成 上矢部高等学校長

#### 職員自己紹介

副校長 野澤 恵津子 教頭 田中 講平

学習支援 GL 山崎、生活支援 GL (宮本 欠席)、生徒活動 GL 上釜

進路支援 GL 渡部、総務運営 GL (齊藤 欠席)、インクルーシブ教育推進担当 古河

### 3 会長・副会長の選出

会長 鈴木 淳子委員

副会長 築瀬 公成委員（校長）

#### 4 会長あいさつ

昨年度より評議員を務めている。普通科と美術科の並置校で、インクルーシブ実践推進校という魅力と特色がある。特にインクルーシブの教育課程を他校のモデルとなる形で、どのように進めていくのかに関心がある。学校運営のサポートになる学校運営協議会となるようにしたい。

#### 5 学校運営の基本方針 校長より

学校教育目標を軸に教育活動を行っている。各枠組みの中で令和6年度からの新たな4年間の目標を立てた。この4か年の計画を受けて、本年度の目標がある。

- ・教育課程・学習指導について。国全体で取り組んでいることだが、自ら課題を発見し課題を解決する探究的な学びの実践である。知識ベースから一歩進んで、コンピテンシーベースの学習への移行が必要であり、どの様に問題解決をしていくかが重要。各授業に応じた探究的な学習に取り組んでほしいと職員に伝えている。

- ・生徒指導・支援で、学校の行事、部活動など、生徒が主体的に活動して達成感を得られることを目指している。部員数が増えてきた男子バレー部は勝利至上主義ではなく自分たちで運営して新しい形の部活動を実践しており、達成感につながることを期待している。働き方改革が問われる中、部活動の在り方に変化が見込まれることも含め、本校でのよりよい部活動の在り方を模索していきたい。

- ・進路指導支援。生徒一人ひとりが自分に適した進路選択ができるよう丁寧に取り組む。

- ・地域等との協働です。本校は42年前に開校して以来美術科の特色を活かして地域との連携を行ってきたが、コロナ禍の影響で、以前よりも協働した活動が減っている。再び活気づくための手始めとして、鳥が丘小学校のイラストクラブと本校のアニメ漫画研究部の連携を考えている。

#### 6 令和6年度学校目標について

##### (1) 学習支援グループ

###### 学習活動について

本校の生徒には伸びしろを感じる。特にコンピテンシーの部分については十分に伸ばせる。学校全体として授業改善に努めたい。今、授業相互見学を行っている。私は英語科だが英語は実技教科としても一流であるべきと考えており、体育や美術などの実技科目からヒントを得ている。こういった視点を後期の授業改善に繋げていきたい。

事故防止についてはテスト・成績処理の点検等で事故を起こさないよう、適切に対応する。

##### (2) 生徒活動グループ

生徒の主体性をテーマに、生徒が活躍できるよう取り組んでいる。

体育祭では、部活動の生徒に担当を割り振ったところ、生徒がよく動き円滑な運営ができた。美術科と普通科の生徒が連携して体育祭のTシャツをデザインするという科を越えた取組もできた。文化祭もよい準備をしたい。何かよい形で地域との連携もできればと考えている。

### (3) 生徒支援グループ

生徒一人ひとりの課題について支援体制の充実を図っている。教育相談についてはコーディネーターが4名いる。教育相談連絡会を週一回行っている。SSW、SCは週一回の勤務。医療連携も積極的に進めており、定着しつつある。

生徒の身だしなみ、マナー等で地域の方々にご指摘を受けることもあるが、担任を中心に教員間の連携をとり学校全体で指導をしている。

### (4) 進路支援グループ

進路実績を見るに、進路未決定者を減らすという昨年の目標については連携生も含め、目標達成と言える。生徒の体験記の部分は本校の生徒が3年間学んだ結果が文章によく表現されている。これを後輩がそれぞれの進路実現に活かして欲しい。

「総合的な探究の時間」の指導計画を学校全体として3年間を見据えた形で整えている。

多様化する時代の中で、進路指導についても試行錯誤している。今の時代、フリーターという結果であっても本人にとって前進した結果であることも考えられる。時代に合った進路指導という観点も意識して、これからも検討し取り組んでいきたい。

### (5) 総務運営（副校長から）

PTA活動を支援していく。昨年は竹灯籠の作成など地域交流を行った。今年度も行う予定。今年度のPTA活動の運営上の取組として、会計処理を無理なく適切に行いたい。

学校目標の中では特にHPの更新をタイムリーに行うことで、学校の魅力をより多く発信したい。地域の皆様はもちろん多くの人に見てほしい。

### (6) インクルーシブプロジェクトチーム

今年度は16名の1年生が入学している。全県でも多いほう。本年度入学生は順調に学校生活を送っている。個々のニーズには支援担任を中心に対応している。

進路については、手帳を使った就労も行っている。企業見学・体験を地元の企業にお願いしている。専門学校の見学も実施。

学校全体での取組として、地域の方に講演をお願いしている。今後も続けていきたい。

対象の中学3年生にはインクルーシブ校か特別支援学校かという進路の選択がある。インクルーシブ校の利点は、学校行事や部活動などに取り組めるところである。その様子を学校説明会では伝えていきたい。

## 7 質疑応答

杉本委員：HPについて 私立とはかなりの差がある。業者は入っているのか

校長：基本的には職員が管理している。様式等については県が一律で管理している。

鈴木会長：HPのデザインは美術科の生徒にまかせてはどうか。デザインなどは若い力には勝てない。探究の授業でやるなど工夫できるのではないか。

小泉委員：以前、腹立たしい先生がいた。登下校時に道が狭い中、二人乗りなどがあつたとき、「勉強のできる学校も同じようです」との返答があつた。これは生徒を馬鹿にする言い方。今の生徒は明るく挨拶をしてくれる。先生方もよく考えて指導してほしい

校長： 人権意識をもって、生徒指導に当たっているが、そういうことに抵触してしまうこともあるかと思う。気を付けたい。

小泉： 最近の通学の態度はよい。以前は道路にはみ出して5人くらいで歩いていた。

熊野委員：中学校でも、駐車場にたまっていると苦情がある。

副校長：最近はセブンイレブンから注意を受けて対応した。生徒へは地域の人は見ているよと周りを意識するよう指導している。

鈴木会長：インクルーシブについて

特別支援学校はインクルーシブ推進校にくらべ（人数のかけ方が）手厚い。インクルーシブ推進校では、進路指導などそのような体制が取れない苦労があるのではないか。インクルーシブでは、ICTを活用しての支援を行っているのか。

インクルーシブPT：以前に比べ、授業ではICT機器の利活用は進んでいる。特別募集での入学生徒の問題として授業についていけない現状はある。受検において学力試験を課していない中、学力については突き詰めるのはナンセンスである。しかし、授業についていけずに悩む生徒もいる。部活動や行事などに参加し、そこに学校生活の充実感を感じることができるのであれば本校に通う意味もあると考える。

特別支援との違いは、やはり大人の目の数。進路指導に関しては、入学の段階から誤解のないように説明している

ICTに関してはインクルーシブの予算を使い、視覚からの支援という形で活用している。少し前は、PCの入力ができない子がいたが今はできる子が多い。書字に問題がある子でも、PCの利用でフォローできるかと思う。

熊野委員：障がい受容ができていない保護者が、上矢部高校の名前を出す。特別支援のように障がい者としてくくられない、普通科として入学できるインクルーシブという制度を選ぶ保護者が多い。中学校の進路指導でもインクルーシブの説明をするが、なかなか伝わらない。

小学校では手をかけてくれる。中学校ではそれが少し減る。そのことで苦情が入ることもある。高校は義務教育ではないし、さらに支援は少なくなる。社会に出るにあたって、必要であると説明しているが。

校長： インクルーシブについては、本校でも学校説明会でしっかりと説明したい。説明会に参加してほしい。

熊野委員：保護者が助けてもらって当たり前という感覚でいることがある。うちの子が、数学を受けたくないというから受けさせないでほしいとか、一般級がいいから一般級にしてほしいなどといった要求がある。インクルーシブの本当の意味が保護者に伝わっていない現状がある。

鈴木会長：インクルーシブと特別支援の比較表を作ってみたらどうだろうか。両方の特徴を捉えられるようにして、インクルーシブでできる範囲がどこまでか保護者に伝える。連携生の学習評価についてはどうか

校長： 県の統一した制度で行っている。比較表は教育委員会に比較表を作ってもらえるのがよい。インクルーシブだけではなくて、クリエイティブや夜間定時制なども含めて中学校での進路選択として、よい選択ができるようにしていけるとよい。

岩下委員：登下校について

ここに来る前に自転車3人乗りを見た。戸塚の道は狭い。車がすれ違うだけでもやっ  
とである。注意できるときはしようとは思う。坂道でスピードを出してしまうのは心配。

副校長： 知らない高校生への注意は難しい思う

岩下委員：その時は学校に連絡する。

副校長： その他、ご質問・ご意見はございますか。

佐藤委員：インクルの話だが、卒業した時に孤立しないよう社会に出たときの福祉機関との  
つながり方について伝えるとよい。孤立し困難に直面してしまう子供が多い。

8 令和6年度の学校評価（目標設定）について承認

9 その他（連絡等）

・今後のスケジュールの具体的な日程については今後お知らせする。

#### 地域連携部会記録 ～小中高連携を強化するには～

記録：上釜

熊野 リカ委員 岩下 亜希子委員 校長 築瀬公成 教頭 田中講平

熊野委員：・障がいがある場合小学校では手厚い支援があり、保護者はやってもらって当たり前の気持ちでいる。中学校入学で、学校ができることとできないことがある。子どもに良かれと思って保護者は躍起になるが、子ども目線がない場合もある。義務教育である中学校では、基本的な生活習慣をまず身につけることが最優先である。学力差がある中で、一般級で共に学ぶことばかりに固執している。

・中学校は多様な生徒が1つの教室に存在するため、真ん中に合わせた授業を展開し、学力が高い生徒へのチャレンジ問題を用意している。

校長： 高校では学力的には均一化している。

教頭： 前任校の厚木清南定時制フレキシブルコースでの経験から話すと、朝起きられない生徒、おとなしい生徒が多いが優しい生徒も多く、助け合って学校生活を送っている。子どもの障がいを受容できない保護者への対応が難しい。家庭（保護者）、本人、学校の三者がどう協力体制を作るかがポイント。

校長： 学校説明会の中で、インクルーシブの情報発信がもっと必要だと痛感した。説明会では共生社会を目指す学校と伝えているが、理念とともにインクルーシブ教育の詳細をわかりやすく説明し、中学生とその保護者の理解を深めたい。

## 教育活動部会記録

記録 山崎勇

鈴木 淳子委員  
野澤 恵津子副校長

杉本 次郎太委員  
渡部 謙一総括教諭

佐藤 洋資委員  
山崎 勇総括教諭

副校長： 上矢部高校の教育活動関係で、進路・生徒指導・学習に関連する事項についてご意見・ご質問をください。

鈴木委員： いじめ事案について現状は？心の弱い生徒への対応は？

山崎総括教諭： いじめについては、現時点で把握している事案はなし。心の問題については、教育相談チームを中心に対応している案件が複数あり。主訴としては、家庭環境の問題・友人関係・異性関係など多岐にわたる。コロナに起因する対人スキルの脆弱性が原因かもしれないが、養護教諭への相談件数や SC・SSW につなぐ件数も年々増加傾向にある。

鈴木委員： 大学でもかなり増えている。コロナ明けに増加している。就職活動に失敗して、自己肯定感を失ってしまうケースもあり。予約制で精神面のカウンセリングを行っている。保護者自身が課題を抱えているケースも多い。コミュニケーション力の低下は深刻。

渡部総括教諭： こちら側が評論家になってはダメ。枠組みを変えることで対応していくべき。変化を恐れずに、新たな手法に踏み出すべき。

杉本委員： 通信制高校出身の学生が増えている。人との関わりを避けたいのか？

副校長： 昨年度上矢部高校を辞めて通信制に転学した生徒も数名いる。

山崎総括教諭： そのような生徒を減らすために、学びの継続に向けて、単位認定に関する新たな考え方を検討するよう校長より指示あり。

佐藤委員： 就業活動を専門にしている私としては、リモートワークが認められている企業数は年々減少している感覚。リモートでなければダメは通用しないと思う。安定した就業には、コミュニケーション力の向上が求められる。

杉本委員： 1,000 人規模の通信大学が開校される。入学説明会への参加者多数。

鈴木委員： 学生たちは自分のスマホの中で生活している傾向が強い。狭い世界で生活しているため、情報に偏りがある。ニュースも持ち主の趣味や嗜好の分析に基づいて選ばれたものしか見る機会がない。

副校長： 探究したくとも知識が不足していたり、狭い分野に限定されていたりと上手くいかない原因のひとつになっている可能性あり。現在、この部会で話されているような話題に、違和感なく参加できることが探究活動に結び付くのでは？